方言の形成と意味変化
――「スガリ」を例として――

澤　村　美　幸

1．本研究の目的と方法

1．1．目的

東北地方で、＜蜂＞を表す方言に「スガリ」という語がある。この「スガリ」は、『万葉集』にも出てくる「スガル」という古語が、形を変え、方言の中に残ったものであることは、よく知られていることである。しかし、東北から遠く離れた九州にも「スガリ」という語があることがわかっている。ここまでのことからは、「スガリ」という方言の分布は、かつて柳田國男の唱えた「方言周圏論」の典型的な例と考えてよいだろう。しかし、語形の上では東北と西南の一致を示すようではあるが、九州での「スガリ」という語の意味は、＜蟻＞であり、東北の＜蜂＞とは異なる。

この「スガリ」の方言形成については、これまで加藤正信（1987）や小林隆（2008）などにおいて東西における意味変化の違いが関わるものとして注目されてきた。しかし、どのようにして「スガリ」が東北と九州で異なる意味を表すようになったのかという経緯の詳細については、十分明らかになったとは言い難い。

さまざまな事例を概観すると、この「スガリ」のように、もとは同じ中央語であったものが、東西で異なる意味変化を起こし方言を形成することは、日本語方言にとってきわめて一般的な現象のように思われる。したがって、方言形成と意味変化の関係について考えることは、日本語方言形成論にとっての重要な課題と言える。この課題に取り組むためには、多くの事例をもとに、東西の意味変化のパターンを整理し、類型化を行う必要があるであろう。しかし、方言形成研究の現状においては、櫛引祐希子（2006）などの考察は見られるものの、事例研究の蓄積すら乏しい段階にある。

そこで今回は、この「スガリ」を事例とし、方言形成における意味変化の東西差の問題に取り組んでみたい。

1．2．方法

最初に、ここで使用する方言資料について説明しておく。「スガリ」の全国的な分布地図を描くための資料として用いるのは、小林隆・篠崎晃一（2001）「消滅する方言語彙の緊急調査研究」第3調査票（調査項目13）の結果である。この調査は2001年度に通信法により、全国2,000の市町村に対して行われ、各市町村の教育委員会に調査票を送付し、条件に合う話者に回答してもら

うという方法がとられている。調査の詳細については、小林・篠崎（2003）を参照していただきたい。この調査によって、最終的に回収できた調査票は1092件であったが、このうち回答者が言語形成期を調査地点で過ごしたという、いわゆる「生え抜き」の条件を満たすもの875件を対象とした。

話者には、「スガリという虫がいるかどうか（スガリの有無）」を確認し、「いる」と回答した話者には、「どのような言い方をするか（語形）」を記載してもらい、さらに「スガリというのはどのような虫か（意味）」を選択肢から選んでもらうという形式を取っている。以下に、実際の調査票から抜粋する。分布図は、「スガリという虫がいる」との回答があった186件の情報にもとづいて作成した。分布の詳細については、追って述べることとする。なお、選択肢に挙げた6つの意味は、いずれも『日本方言大辞典』に「スガリ」の意味として掲載されているものである。

13、あなたの土地には、スガリとか、スガル、スガレ、スガネ、スガイ、スアレ、スアイなどという名前で呼ぶ虫はいませんか。「いない」「いる」のどちらかに○をつけてください。

- いない
- いる ——→ どんな言い方ですか。

あなたが使う語形を教えてください。〔　　〕

それは、どんな虫ですか。該当する意味に○をつけてください。あてはまるものがないときは、「その他」にご記入ください。

1．蜂（はち）
2．似我蜂（じがばち）
3．地蜂（じばち）
4．土蜂（つちばち）
5．足長蜂（あしながばち）
6．蟻（あり）
7．その他〔　　〕

また、補足的に、白井祥平監修（2000～2005）『全国方言集覧』全14巻を利用する。この資料は、主として近代以降の方言辞典や雑誌論文などから、動植物に関する方言名が網羅的に収集され、都道府県別に整理されたものである。この資料は、「消滅する方言語彙の緊急調査研究」よりも古い時期のデータが集められているという点で有用であるが、そのもととなった方言辞典や雑誌論文の調査の方法、時期等はさまざまであり、一定ではない。また、全国一斉調査ではないため、方言辞典が作成されていない、あるいは、作成されていても記載がない地域については情報が得られないことになる。このような点を考慮して、あくまでも補足として利用することとする。

さて、最初に述べたような目的にもとづき、本研究では、以下の方法・順序で論を進めていく。

① 文献から、中央における「スガル」がどのような語であったかを確認する。(→第2節)
② 全国調査の結果から、方言における「スガリ」の意味の分布を明らかにし、各地方における意味変化の過程について検討する。(→第3節)
③ ①と②との総合から、「スガリ」の方言形成の経緯について結論を導き出し、方言形成論に提起できる問題をまとめる。(→第4節)

2．文献に見られる中央語の「スガリ」の意味

中央に残された文献上では、方言で用いられる「スガリ」という語形は見られず、「スガル」という形の用例が、『万葉集』中の和歌3首に見られる。以下の(1)から(3)がそれである。引用はすべて『日本古典文学大系』による。

(1) 末乃珠名者　胸別之　広吾妹　腰細之　須軽娘子之　其姿之　端正尓（すゑのたまなは　むなわけの　ひろけきわぎも　こしぼその　すがるをとめの　そのなりの　きらきらしきに）(『萬葉集』九・1738番)
(2) 春之在者　酢軽成野之　霍公鳥　保等穂跡妹尓　不相来尓家里（はるされば　すがるなすのの　ほととぎす　ほとほといもに　あはずきにけり）(『萬葉集』十・1979番)
(3) 海神之　殿甍丹　飛翔　為軽如来　腰細丹　取飾氷（わたつみの　とののいらかに　とびかける　すがるのごとき　こしほそに　とりかざらひ）(『萬葉集』十六・3791番)

多くの辞書や注釈書等では、これらの「スガル」は＜似我蜂＞の意味として捉えられている。「似我蜂」とは蜂の一種で、右下の図1のように、体色は黒く、特に腹部の細さが特徴的な蜂である。

(1)の「須軽娘子（すがるをとめ）」とは、「似我蜂のように、腰細でなよやかな美しい少女」という意味を表わしている。(2)は、「酢軽成（すがるなす）」の「なす（「なる」とする説もある）」という言葉の解釈が分かれ、「似我蜂が生まれる」、「似我蜂が羽音を立てる」などと諸説あるが、「スガル」はやはり＜似我蜂＞の意味と解される。(3)は、「飛びまわる似我蜂のように腰細に装い飾り」という意味で、「腰細」という言葉と共に用いられる点では(1)の歌ともよく似ている。

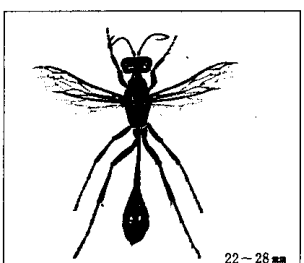


図1　似我蜂の写真

しかし、『万葉集』の3例からは、「スガル」が「腰の細い蜂」を意味することは読み取れるとしても、蜂の種類は多く、「似我蜂」の他にも腰が細いという特徴を持った蜂もいる。そのため、『万葉集』中の「スガル」が本当に＜似我蜂＞という特定の蜂の意味で使用されていたかどうかを読み取ることは難しい。このことに関して、動物学者の東光治は、『万葉集』中の動物について解説した『萬葉動物：写真と解説』の中で、「スガルは広く蜂類の総称」であるという説を展開してもいる。では、「スガル」

を＜似我蜂＞という特定の蜂として解釈するための積極的な根拠はないのだろうか。

その点に関しては、『日本書記』の雄略天皇六年・七年の条に登場する人物の名前が参考になる。

(4) 三月の辛巳の朔丁亥に、天皇、后妃をして親ら桑こかしめて、蠶の事を勧めむと欲す。爰に蜾蠃に命せて、國内の蠶を聚めしめたまふ。是に、蜾蠃、誤りて嬰兒を聚めて、天皇に奉献る。天皇、大きに咲ぎたまひて、嬰兒を蜾蠃に賜ひて曰はく、「汝、自ら養へ」とのたまふ。蜾蠃、即ち嬰兒を宮墻の下に養す。仍りて姓を賜ひて、少子部連とす。(『日本書記』雄略天皇六年,『日本古典文学大系』67巻)

この「蜾蠃」については、最初の例の直後に割注で「人ノ名也。此云須我屢」という説明がついおり、「スガル」と読むものとして間違いない。『大漢和辞典』では、「蜾蠃」を「蜂の一種。じがばち。」と説明しており、『漢語大詞典』においても、「蜾蠃」は「寄生蜂的一种。亦名浦卢。腰细，体青黑色，长约半寸，以泥土筑巢于树枝或壁上，捕捉螟蛉等害虫，为其幼虫的食物，古人误以为收养幼虫。」と、似我蜂の特徴と合致する説明がなされている。このような漢字の意味との対応から、「スガル」は＜似我蜂＞の意味であるとみなすことができる。

また、先に挙げた「蜾蠃」が「蠶」を集めるという(4)の例は、「蜂」というと比較的イメージしやすい「蜜蜂」などの蜂とは異なる、「似我蜂」という蜂の特徴をよく示している例である。似我蜂は、蚕の幼虫などを毒針で麻痺させて捕らえ、それに自身の卵を産みつけ、土中に穴を掘って巣とし、そこに卵を生み付けた幼虫を埋めるといった特徴がある。(4)では、「蜾蠃」という人物が「蚕の子」を集めるよう命じられる点は、蚕の幼虫を捕らえるという似我蜂の生活形態と合致する。このような逸話からも、やはり上代の中央語においては、「スガル」という言葉は＜似我蜂＞という特定の蜂を表していたと捉えるのが妥当であると思われる。

ところで、この＜似我蜂＞を意味する「スガル」という語は、歌論書や古辞書などを除き、『万葉集』以降の文献においては、全く用例が見られない。「スガル」が＜似我蜂＞という特定の蜂を意味する言葉であったならば、そもそも文学作品中で取り上げられる機会自体が少ないという理由も考えられるが、それにしても、なぜそれほどまでに早く文献上から姿を消してしまったのだろうか。

その答えの手がかりとなるのが、平安時代末期に成立した歌論書『袖中抄』の記述である。筆者の顕昭は、『万葉集』の(2)の和歌の解説に、

(5) 或人の関東にくだりて侍しは、あづまには蜂をすがると申とぞ。(『袖中抄』第十,『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』文学篇 第十三巻＜歌学書二＞)

という情報を付け加えている。また、『顕注密勘抄』にも同様の記述がある。

(6) 東國には蜂をすがると申すとぞ、ある人申し侍りし。(『顕注密勘抄』,『日本歌学大系』別巻第五)

『顕注密勘抄』は『古今和歌集』についての顕昭の注に藤原定家が附勘したものであるので、(6)は、おそらく『袖中抄』における顕昭の記述を踏襲したものと考えられる。これらの記述が正しければ、「スガル」という言葉は、中央の人々にとっては、平安時代末期には既に東国方言と

して捉えられていたことになる。このことから、「スガル」は平安時代には既に中央で古語化しており、現存する数少ない上代の文献にかろうじて痕跡を留めただけで、中央から姿を消したものと考えられる。

以上のことから、「スガル」が中央において、＜似我蜂＞という特定の蜂の意味で用いられていたことと、平安時代には中央では既に古語化し、東国方言として認識されていたことを確認した。そこで次に、方言における分布状況などから、意味変化の経緯を明らかにしていきたい。

3．方言における「スガリ」の分布と意味変化

3．1．「スガリ」の全国的な分布状況とその意味

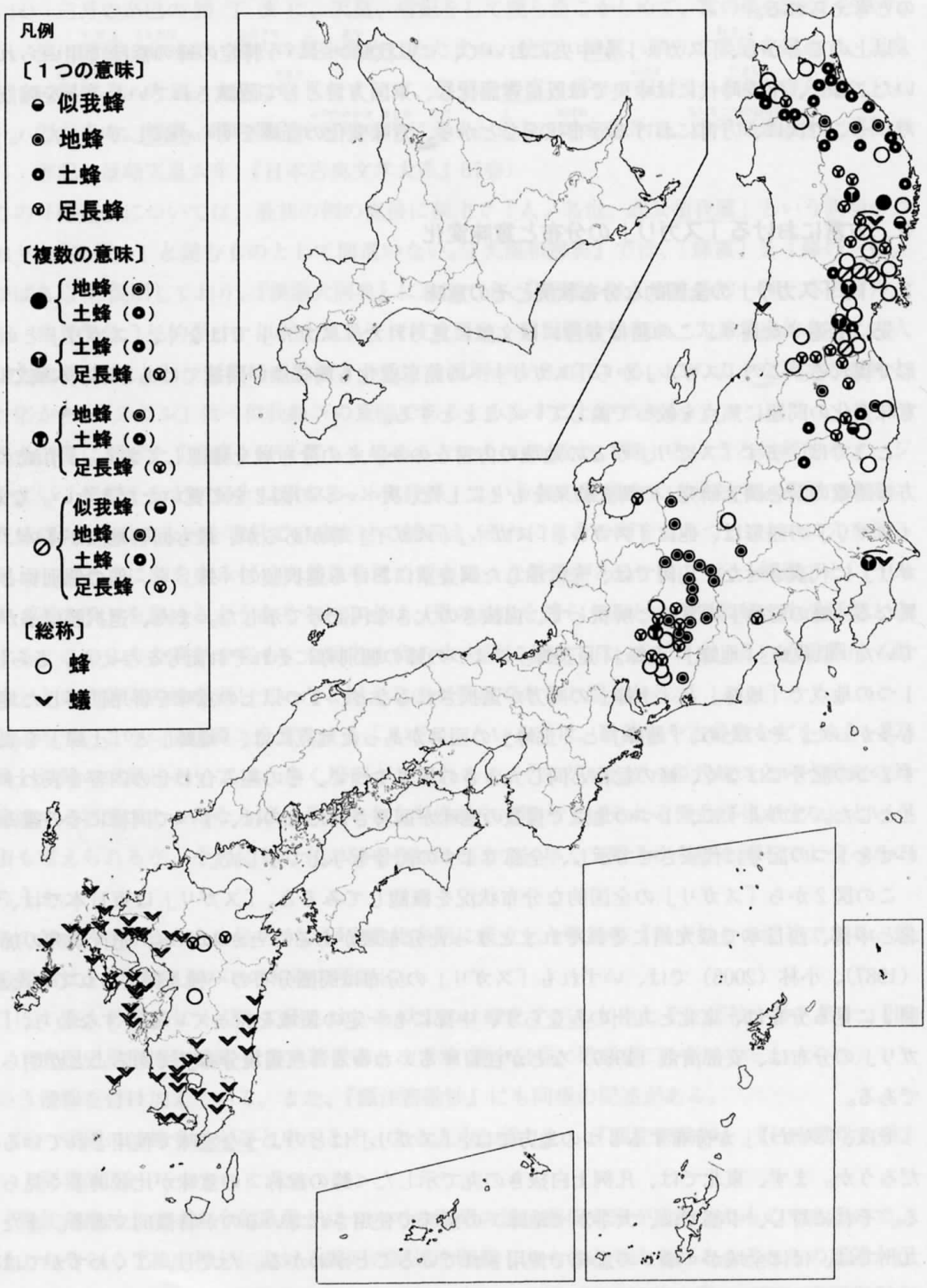
先にも述べた通り、この語は方言には文献に見られた「スガル」ではなく、「スガリ」という形で現れる。この「スガル」から「スガリ」への語形変化も興味深い問題ではあるが、本稿では、意味変化の問題に焦点を絞って論じていくこととする。

ここでは、まず「スガリ」がどの地域の方言なのか、その分布域を確認しておく。「消滅する方言語彙の緊急調査研究」の調査結果をもとにした、次ページの図2をご覧いただきたい。なお、「スガリ」の語形は、他に「スガレ」「スガネ」「スガイ」等があるが、最も回答地点が多い「スガリ」に代表させた。凡例では、先に示した調査票における選択肢の「蜂」を、他の個別称とは異なる「蜂の総称」の意味と解釈して、白抜きの大きな円記号で示した。また、選択肢に挙がっていた「似我蜂」「地蜂」「土蜂」「足長蜂」の4つの蜂の個別称にそれぞれ記号を与えた。さらに、1つの地点で「地蜂」と「土蜂」の両方が選択されるなど、2つ以上の意味を併用回答した地点も多かった。そのため、「地蜂」と「土蜂」の回答があった地点には、「地蜂」と「土蜂」を表わす2つの記号ではなく、蜂の総称と同じ大きさの黒丸1つで、その組み合わせの内容を表わすこととした。このように、1つの地点で複数の意味が回答されたものは、すべて同様にその組み合わせを1つの記号に代表させて示し、全部で4つの記号を与えて示した。

この図2から「スガリ」の全国的な分布状況を概観してみると、「スガリ」は東日本では、東北と中部、西日本では九州にそれぞれまとまった分布域があることがわかる。先行研究の加藤（1987）、小林（2008）では、いずれも「スガリ」の分布は周圏分布の一種と捉えられていたが、図2に見る分布は、東北と九州のみならず、中部にも一定の領域を持っている。すなわち、「スガリ」の分布は、安部清哉（1989）などが注目するいわゆる「三辺境分布」であることが明らかである。

では、「スガリ」が分布する3つの地方では、「スガリ」はどのような意味で使用されているのだろうか。まず、東北では、凡例上白抜きの丸で示した＜蜂の総称＞の意味が比較的多く見られる。それに対し、中部では、大半が＜地蜂＞の意味で使用されているのが特徴的である。また、九州では、ほぼ全域が＜蟻＞の意味で使用されていることがわかる。ただし、ごくわずかではあるが、＜蜂の総称＞や個別称の分布も見られ、＜蟻＞の意味との関連が注目される。

図２　「スガリ」の意味の分布



「消滅する方言語彙の緊急調査研究」2001年度調査結果より地図化

このように、「スガリ」という語の意味は、地方ごとにさまざまではあるが、それらはいずれも蜂の個別称や総称や、＜蟻＞という昆虫であり、＜似我蜂＞との意味的な関連性が高いものである。このことから、これらの意味は、もとの＜似我蜂＞から派生し、変化したものである可能性が高いと考えられる。しかし、＜似我蜂＞からの意味変化の方向性や変化の度合いについては、それぞれの地方ごとに違いが見られるため、次節では地方ごとに意味変化の経緯について詳しく見ていきたい。

3．2．地方別に見た意味変化の経緯

3．2．1．東北

3．2．1．1．東北における分布の特徴

では初めに、東北における「スガリ」の意味の分布関係から、その変化の経緯を推定していくこととする。図2によれば、東北の分布には、次の点が認められる。

① ＜似我蜂＞の意味の「スガリ」が、わずかではあるが現れている。

② ＜地蜂＞、＜土蜂＞、＜足長蜂＞など、さまざまな個別称が分布している。

③ ＜蜂の総称＞の意味での使用地点が広く見られる。

まず①の点については、『全国方言集覧』にも、東北では岩手県江刺市、宮城県仙台市、同多賀城市に＜似我蜂＞の意味の「スガリ」が見られ、文献で見た中央語の＜似我蜂＞の「スガリ」は、東北にも伝播したと考えられる。したがって、②に挙げた他の蜂の個別称や、③に示した＜蜂の総称＞は、中央から伝播した＜似我蜂＞の意味が東北で変化し、新たに生じた意味であると推定される。

問題は、②のさまざまな個別称と、③の＜蜂の総称＞が、＜似我蜂＞からの意味変化において、どのような関係にあるかということである。この問題については、まず、意味変化の一般的な傾向としては、個別称から総称への変化の方が起こりやすいということが挙げられる。この点から変化の流れを推測すれば、もととなった＜似我蜂＞の意味から②のさまざまな個別称の意味が生じ、さらに③の＜蜂の総称＞へ変化したという経緯を推定することができる。

そして、図2を大局的に見渡せば、東北における「スガリ」の意味の分布は、宮城県のあたりを中心に、＜土蜂＞や＜地蜂＞といった個別称（1つの意味）が比較的周辺部に位置しており、その内側に2つから4つの複数の意味が、さらにその内側に総称が分布するというように、あたかも図3に模式化するような把握ができそうである。



図3

このような地理的な分布関係からは、先の推定が成り立つ可能性が高いことが指摘できよう。すなわち、東北に伝播した「スガリ」は、＜似我蜂＞の意味から、＜土蜂＞や＜地蜂＞といった他の個別称へと意味を変化させるとともに、他の個別称を巻き込みながら、

次第にその意味を拡大し、最終的に＜蜂の総称＞へと意味が拡大していったという経緯が考えられるのである。なお、図2では、周辺部に当たる青森県の津軽地方にも、＜蜂の総称＞の分布がまとまって見られる。しかし、この地域は地理的には周辺部に当たるものの、東北の中では比較的開けた都市であることから、東北の中心部同様、＜蜂の総称＞への変化が起こりやすかったものと推定される。

なお、②に挙げた個別称の中で、＜土蜂＞や＜地蜂＞は周辺部に単独で分布しているが、＜足長蜂＞だけは周辺部というよりもむしろ最も内側の＜蜂の総称＞に絡むように分布しているものが多く、その点で他の個別称の蜂と異なっている。この問題に関しては、以下の意味変化の過程についての考察の中で詳述することとする。

3．2．1．2．＜似我蜂＞からの意味変化の過程

では続いて、「スガリ」が、どのような点を契機として、＜似我蜂＞から他の蜂の個別称へと意味が変化したのか、また、いかなる経緯を経て＜蜂の総称＞へと変化していったのかなど、その変化の過程について詳しく考察していく。

まず、＜似我蜂＞から、他の蜂の個別称への変化については、先の②に挙げたような蜂の種類と、＜似我蜂＞との関係が問題として残る。＜似我蜂＞が、＜地蜂＞・＜土蜂＞・＜足長蜂＞に変化した契機を明らかにするためには、これらの蜂がどういう特徴を持った蜂であるかを理解しておかなければならない。以下に、これらの蜂の特徴を、似我蜂との共通点を中心にまとめる。

「地蜂」——土中に巣を作る。体が黒い。腰は細くない。

「土蜂」——土中に巣を作る。体が黒い。腰が細い。

「足長蜂」——土中ではなく、人家の軒下などに巣を作る。体色は黒色ではない。腰が細い。

このうち、「地蜂」と「土蜂」は、いずれも「土中に巣を作る」点、「体が黒い」点が似我蜂との共通点として挙げられるが、これらの蜂は「腰の細さ」において異なり、外見上の類似性はそれほど高くない。そのため、「体が黒い」という共通点よりも、「土中に巣を作る」という生活形態上の共通点が、＜似我蜂＞からの意味変化の重要な契機となったと考えられる。そのため、以下では「土中に巣を作る」という特徴を持った蜂（似我蜂・地蜂・土蜂）を、「土系の蜂」と呼ぶこととする。日本全国に生息する蜂の種類は豊富である中、このような「土系の蜂」へと変化した「スガリ」が特に多く見られるということは、もとの「似我蜂」からは、同じ「土中に巣を作る」という共通点を持った「土系の蜂」への変化が特に起こりやすかったものと考えられる。

一方、「足長蜂」は、「腰が細い」という点以外に「似我蜂」との共通点はなく、「土系の蜂」への変化のしやすさに比べると、＜似我蜂＞から＜足長蜂＞への変化は起こりにくかったものと推測される。「足長蜂」は、「土系の蜂」に比べて、唯一「土中に巣を作らない」点が特殊であることから、以下では「非土系の蜂」と呼ぶことにする。

以上のような「土系の蜂」と「非土系の蜂」という点に注目して、改めて図2における東北地方での分布を確認してみると、「土系の蜂」である＜地蜂＞や＜土蜂＞の意味が東北地方でもよ

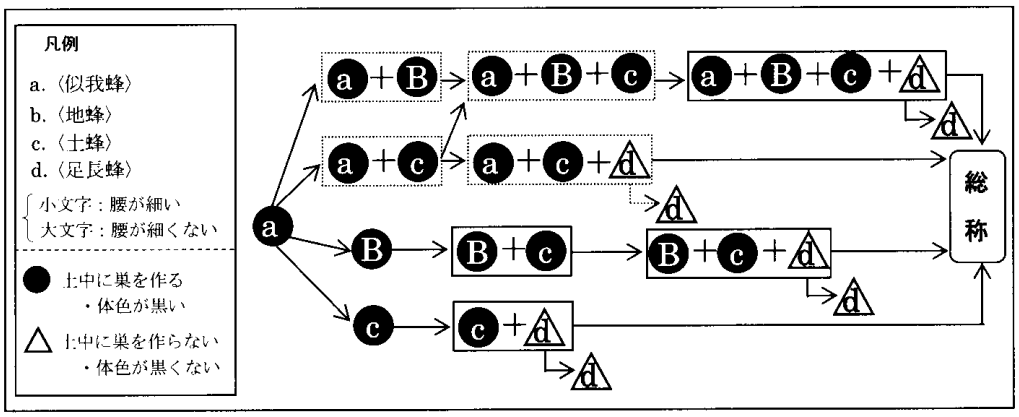


図4　東北における「スガリ」の意味変化の過程

り外側に分布していることがわかる。一方、「非土系の蜂」である＜足長蜂＞は、「土系の蜂」の内側にあり、その分布はあたかも＜蜂の総称＞に絡んでいるようである。

このように見てくると、「スガリ」は、もとの＜似我蜂＞から、まず「土中に巣を作る」という共通点を契機とし、同じ「土系の蜂」である＜地蜂＞や＜土蜂＞へと変化し、あるいは＜似我蜂＞の意味を残しながらも、他の「土系の蜂」の意味をも巻き込みながら、次第に意味を拡大していき、最終的に＜蜂の総称＞へと変化していったものと考えられる。しかし、＜蜂の総称＞化に当たっては、単に「土系の蜂」の意味が次第に拡大していっただけでなく、その上で「腰の細さ」という共通点を契機として＜足長蜂＞という、「非土系の蜂」の意味をも獲得することが必要であったのではないかと思われる。この点は、＜足長蜂＞の分布が、特に＜蜂の総称＞の周辺に現れることからも説明できる。つまり、「スガリ」が＜蜂の総称＞へと変化するためには、「土系の蜂」と「非土系の蜂」の両方を表わせるようになって初めて、総称化が起こったものと考えられる。なお、＜足長蜂＞が総称の周りに単独で分布しているものも多いが、これは「スガリ」が「非土系の蜂」の意味を獲得した結果、それまで「スガリ」を特徴付けていた「土系の蜂」の意味が打ち消され、総称化の一歩手前で、新たに獲得された＜足長蜂＞の意味だけが残った場合もあったという可能性が考えられる。

以上のような東北における意味変化の過程についてまとめると、次ページの図4のようになる。なお、図4では、現在の分布に現れている意味の組み合わせは実線の四角で囲み、現在の分布に現れていないが、過去に存在したと思われる組み合わせは点線の四角で囲んだ。

この図からもわかるように、東北地方における「スガリ」は、＜似我蜂＞の意味をもとに、まず「土系の蜂」である他の蜂の個別称の意味へと変化し、または「土系の蜂」の意味を含んで意味が拡大していった。その後＜似我蜂＞や＜土蜂＞の「腰の細さ」という点を契機として、「非土系の蜂」である＜足長蜂＞の意味をも取り込み、最終的に＜蜂の総称＞へと変化したという経緯が考えられる。

3．2．2．中部

3．2．2．1．中部における分布の特徴と意味変化の経緯

次に、中部での「スガリ」の意味変化の経緯を推定していくこととする。図2によれば、中部における「スガリ」の分布には、次の点が認められる。

① ＜似我蜂＞の意味の「スガリ」は分布していない。

② ＜地蜂＞の意味での使用地点が広く見られる。

③ ＜蜂の総称＞の意味での使用地点も見られるが、その分布は非常に狭い地域に偏っている。

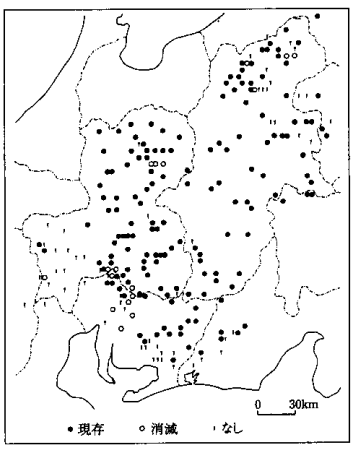
まず①の点から、中部には、中央語の文献に見られた＜似我蜂＞の「スガリ」が伝播したのかどうか、ということが問題になる。しかし、『全国方言集覧』では、長野県に＜似我蜂＞の意味の「スガリ」を6地点確認することができる。この資料は基本的に図2のデータよりも古い段階を反映するものであることを考えると、図2には現れなかった＜似我蜂＞の意味の「スガリ」は、過去には確かに中部にも存在しており、それをもとに、②に挙げた＜地蜂＞という別の個別称への変化や、③の総称への変化が起きたものと推定される。

ところで、③の総称化に関しては、＜蜂の総称＞が分布する周囲には＜足長蜂＞の分布が見られ、中部でも、東北と同様の経緯を経て総称化が起こったものと考えることができる。

3．2．2．2．＜地蜂＞への変化が主流となった要因—文化的背景

しかし、中部では＜蜂の総称＞の意味での分布は、全体から見れば非常に狭い地域に偏っており、②に示したように、中部では＜地蜂＞の意味での使用地点が圧倒的多数を占めている。では、中部で＜地蜂＞への変化が主流となったのはなぜなのだろうか。

この点について考える際には、中部で、地蜂の幼虫を食すという文化が存在し、そのため、地蜂の巣を獲得するための習俗が現在でも残っているという言語外的な要因を視野に入れる必要がある。右の図5は、民族昆虫学者の野中健一が、この地方でのクロスズメバチ食（クロスズメバチとは、地蜂の別名）の存否について、聞き取り調査によって明らかにしたものである。全てが重なるわけではないが、図2の＜地蜂＞の分布と図5のクロスズメバチ食が現存している地域の分布はよく似ている。恐らくはそのような文化的背景に裏打ちされていることが、中部の大半が＜地蜂＞という「土系の蜂」の意味を保っている理由と思われる。すなわち、中部では上記のような言語外的要因がはたらいたことから、「スガリ」という語が＜似我蜂＞から＜地蜂＞へと変化したところで意味が固定し、総称への発展にブレーキがかかったものと考えられるのである。



野中健一（2005）『民族昆虫学 昆虫食の自然誌』(p.139)

図5 クロスズメバチ食の存否

3．2．3．九州

3．2．3．1．九州における分布の特徴

続いて、九州における「スガリ」の意味変化の経緯を推定していくこととする。図2によれば、九州における「スガリ」の分布には、次の点が認められる。

① ＜似我蜂＞の意味は見られない。

② ＜蟻＞の意味を表わす地域が圧倒的に多い。

③ ＜足長蜂＞の分布や、＜蜂の総称＞の意味での分布もわずかに見られる。

まず①から、九州には、中央語の文献に見られた＜似我蜂＞の意味の「スガリ」が存在したか否かが問題になる。しかし、③に挙げたように、九州にも＜足長蜂＞や＜蜂の総称＞の分布が見られるということは、東北・中部と同様に、かつては＜似我蜂＞の意味の「スガリ」が存在した可能性が高いと判断すべきであろう。また、『全国方言集覧』からは、わずか1例ではあるが、福岡に＜似我蜂＞を意味する「スガリ」を確認できるため、九州においても、＜似我蜂＞の意味がもととなり、他の意味への変化が起こったことが考えられる。

3．2．3．2．＜似我蜂＞から＜蟻＞への意味変化の過程

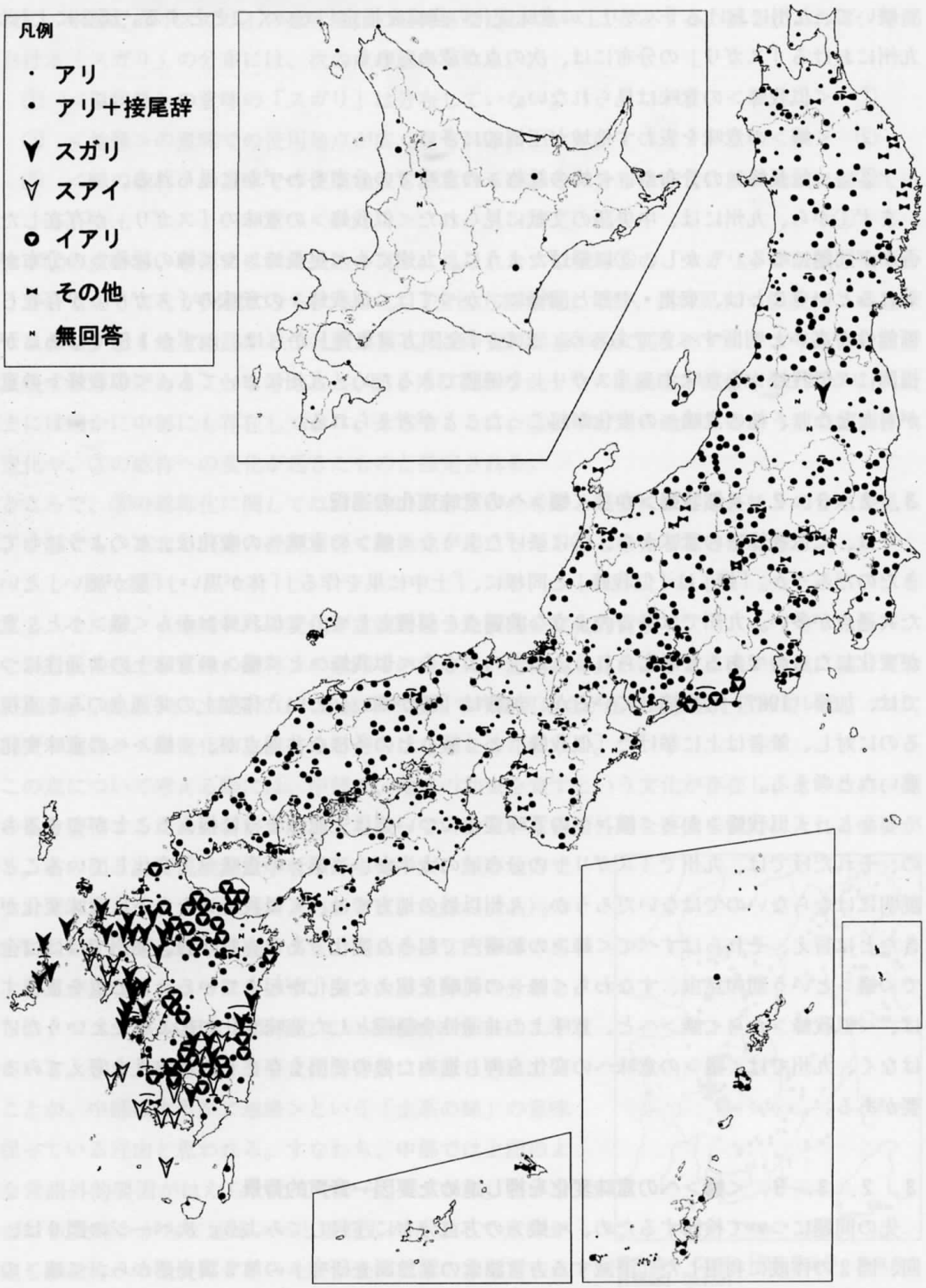
では、＜似我蜂＞の意味から、②に挙げたような＜蟻＞の意味への変化は、どのようにして起きたのだろうか。「蟻」は「似我蜂」と同様に、「土中に巣を作る」「体が黒い」「腰が細い」といった共通点が多い。九州では、このような共通点を契機として、＜似我蜂＞から＜蟻＞へと、意味が変化したものであると考えられる。以上のような＜似我蜂＞と＜蟻＞の意味上の共通性については、加藤（1987）も指摘しているが、加藤は「腰が細い」という体型上の共通点のみを重視するのに対し、筆者は上に挙げた「似我蜂」と「蟻」との多様な共通点が、＜蟻＞への意味変化を導いたと考える。

しかし、＜似我蜂＞から＜蟻＞への意味変化については上記のように捉えることができるものの、それだけでは、九州で「スガリ」の分布域の大半が、＜蟻＞の意味へと変化していることの説明にはならないのではないだろうか。九州以外の地方では、＜似我蜂＞をもとに意味変化が起きたとは言え、それらはすべて＜蜂＞の範疇内で起きた変化である。しかし、九州ではほぼ全域で＜蟻＞という別の昆虫、すなわち＜蜂＞の範疇を超えた変化が起きている。この点を重視すれば、＜似我蜂＞から＜蟻＞へと、意味上の共通性を契機とした意味変化が起こったというだけではなく、九州では＜蟻＞の意味への変化を押し進めた他の要因も存在した可能性を考えてみる必要がある。

3．2．3．3．＜蟻＞への意味変化を押し進めた要因—音声的背景

先の問題について検討するため、＜蟻＞の方言分布に注目してみよう。次ページの図6は、今回、図2の作成に利用した「消滅する方言語彙の緊急調査研究」の第3調査票から、＜蟻＞の方言を尋ねた項目（調査項目1）の結果を地図化したものである。この図6からは、本州や四国で

図 6　＜蟻＞の方言分布



「消滅する方言語彙の緊急調査研究」2001年度調査結果より地図化

は「アリ」ないし「アリ＋接尾辞」という語構成による語が圧倒的に多く分布しているのに対し、九州では「スガリ」や、その変化形である「スアイ」、また「イアリ」（<「イイアリ（飯蟻）」）といった語が多く用いられていることがわかる。つまり九州は、＜蟻＞を表わす言葉として、他の地域とは異なる語を採用しており、それは全国的な傾向とは大きく異なっていると言える。

その理由について考えるとき、見逃せないのが九州における音声的な現象である。すなわち、九州は特に発音の変化が激しい地域であり、『日本方言大辞典』下巻の「音韻総覧」によれば、長崎県五島、宮崎県諸県地方、鹿児島県薩隅地方では非語頭でラ行音が全般に促音化し、福岡県筑後地方、豊前南辺地方では、非語頭で「リ」の音が促音化する傾向があるということである。また、九州では、非語頭で「リ」の子音が脱落し、「イ」になる地域が多いことも特徴的である。つまり、九州では、「アリ［ari］」という語形は、「アッ［at］」や「アイ［ai］」という単音節にも変化し得る、非常に不安定な形態であると言える。そうした音声的背景を考えると、「アリ」という語形の単音節化をできるだけ避けるという必要性から、「スガリ」や「イアリ」といった語をあえて取り入れた可能性が高い。そのような背景こそが、九州において、「スガリ」が＜似我蜂＞から＜蟻＞への意味変化が推し進められた要因であると考えられる。

なお、図2では、岩手、山形、千葉にそれぞれ1地点ずつ、＜蟻＞の意味の「スガリ」が見られる。これらの地域での＜蟻＞への変化も、九州と同様に、＜似我蜂＞と＜蟻＞の共通点の多さが契機となって多元的に起きたものと考えられる。ただし、九州では、音声的背景のために＜蟻＞への意味変化が押し進められたが、本州ではそのような必要性がなかった。そのため、＜蟻＞に意味変化した地域があっても、それが＜似我蜂＞から他の蜂の個別称への変化や、＜蜂の総称＞化という変化の主な傾向に影響を与えるほど発達することはなく、あくまでも個別の地点にとどまったものであると考えられる。

3．2．3．4．＜足長蜂＞と＜蜂の総称＞への変化

最後に、③に挙げた＜足長蜂＞や＜蜂の総称＞への変化について説明しておく。これらの分布が図2において九州でも山間部に見られるという地理的な条件と、『全国方言集覧』のデータから福岡で＜似我蜂＞の「スガリ」が確認されたことを併せて考えると、これらの地点では、もとの＜似我蜂＞の意味が比較的最近まで残っていた可能性があり、その＜似我蜂＞の意味から、「腰が細い」という共通点を契機として、＜足長蜂＞の意味を獲得したものと思われる。そして、＜似我蜂＞という「土系の蜂」だけでなく、「非土系の蜂」である＜足長蜂＞の意味を獲得したことで、他の地方と同様に、一部では＜足長蜂＞の意味のみが独立し、また一部では＜蜂の総称＞化が起こったと見ることができる。

しかし、東北や中部においては、「非土系の蜂」である＜足長蜂＞の意味の獲得は、「土系の蜂」への意味変化の後に起こるものと指摘した。九州で「土系の蜂」への意味変化を経ずして、＜足長蜂＞の意味へと変化したということは、他の地方においても、＜足長蜂＞への変化が、「土系の蜂」への変化の後に起こるとは限らない可能性が出てくることにもなりかねないのではないだ

ろうか。

だが、九州では、＜蟻＞の意味を表わす地域の圧倒的な多さに比べれば、＜足長蜂＞へと変化した地点はごくわずかに過ぎず、蜂の個別称への変化自体が例外的なものであると言ってよい。加えて、九州で多数を占める＜蟻＞は、＜蜂＞とは分類学的に異なるものの、「土中に巣を作る」という特徴を持つ点では「土系の蜂」と共通している。そのように捉えれば、「スガリ」は九州においても、「土系」へと変化しやすい点では他の地方と同様であり、「土系の蜂」への変化を経ない＜足長蜂＞への変化は、きわめて稀なケースであると考えることができる。

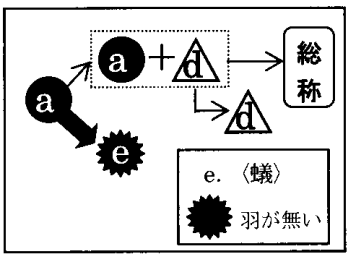


図７　九州における意味変化の過程

以上に述べてきた九州における「スガリ」の意味変化についてまとめると、上の図７のようになる。図中で用いた記号の意味は図４と同様であるが、新たに加わった＜蟻＞と、その特徴については凡例に示した。

４．結論と今後の課題

ここまで述べてきたことをまとめ、意味変化の観点から、「スガリ」の方言形成についてまとめると、次ページの図８のようになる。図８は、縦軸を＜似我蜂＞からの意味変化の度合い、横軸を地理的位置関係として、各地方における「スガリ」の意味変化の地域差を模式化したものである。

そして、図９は、図８に見る意味変化の地域差が、どのような要因で形成されたかを示したものである。方言形成における地域差は、小林（2008）などで指摘されているように、一般的傾向としては、図中に点線で示したように、中央からの距離に比例して、変化の度合いも大きくなると捉えられている。これは、中央から地理的に離れることで、中央語の規範力から開放され、自律的変化が起こりやすくなるためと考えられる。

しかし、「スガリ」の意味変化に関しては、中部や九州では、それぞれ地域独自の文化的・音声的背景がはたらいたことで、中部では意味変化の発達が抑制され、九州では逆に促進された。このような地域独自の背景が要因となり、図８に見たような「スガリ」の意味変化の地域差が形成されたこととなる。

この結果を東西差という観点から見直してみると、東日本では、＜蜂＞の範疇内で意味が変化したのに対し、西日本は＜蜂＞の範疇から逸脱した意味変化が起きたという東西差を見出すことができる。以下、方言形成史に対して、「スガリ」の事例が提起する問題を整理してみよう。

【A．意味変化における東西差の傾向について】

小林（2008）では、再生の東西差に関して、「大局的に見て、中央語の再生は西日本より東日本で活発であるという傾向を指摘できそうである。(p.19)」と述べており、また、櫛引（2006）

では、東西における「エズイ」の意味変化のパターンとして、「東日本は原義の特徴から逸脱していく変化であるのに対し、西日本は原義と異なる意味が発生しても、原義の特徴が残っていく変化である」ことを指摘している。しかし、今回の「スガリ」の事例に関して言えば、意味変化の上で、東日本が西日本よりも活発な傾向を示すとは言い難く、むしろ西日本が原義から逸脱していく変化をしたと考えられるため、意味変化の東西差に関する従来の見解とは逆の傾向が見られた。このことは、東西における意味変化の傾向は一概には論ずることができず、さらに事例を蓄積した上で、慎重に検討していく必要があることを意味するものであろう。

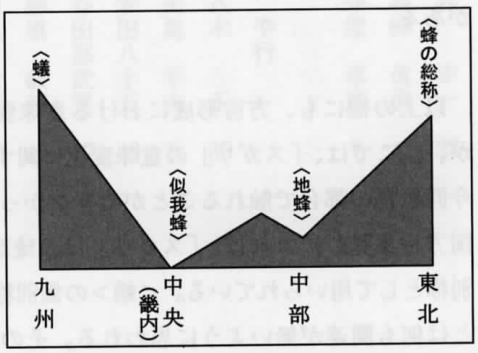


図８　「スガリ」の意味変化の地域差

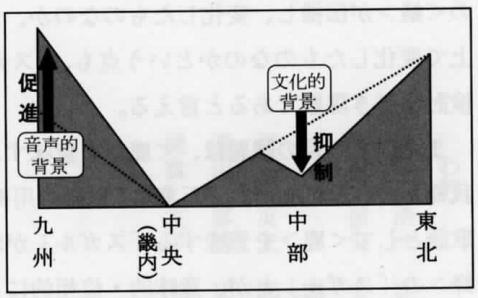


図９　地域差形成の要因

【B. 東日本内部における変化の地域差について】

「スガリ」の事例では、東西差という大きな地域差の他に、東日本内部における地域差も見られた。すなわち、東北は総称化という意味変化の最終段階へと進む変化がより活発に起きているのに対し、中部では、＜地蜂＞という別の蜂の個別称化という、意味変化としては比較的初期の段階にとどまったという点において異なっている。このように、同じ東日本でも、東北がより進んだ変化を見せるのに比べ、中部が保守的傾向を示す点は、小林（2008）でも指摘されているが、「スガリ」の事例においても類似の現象が認められたことになる。こうした東日本内部での地域差は、より単純化すれば、中央（畿内）から地理的に離れるほど、意味変化が進みやすい傾向を示唆するものであろう。この点では、意味変化の地理的傾向は、語彙一般に適用される周圏論的解釈ではなく、むしろアクセントなどの自律的な変化による逆周圏論的な理解に近いものと言えるかもしれない。

【C. 意味変化を規定する文化的・音声的背景について】

上記A・Bで見た意味変化の地域差は、基本的には中央（畿内）的な規範力からいかに解放されるか、その度合いに応じて請じたものと考えてよいだろう。しかし、「スガリ」の事例を見る限り、そうした要因のほかにも地域差を生み出す重要な要因が存在することがわかる。すなわち、図９にも示したように、中部における「スガリ」が＜地蜂＞に変化した段階から先へ進みにくかった背景には、地蜂の子を食するという中部独自の習俗が絡み、総称化への発達が起こりにくかったのではないかと考えられた。また、九州における＜蟻＞への意味変化には、九州独特の音声的な事情が関与している可能性が指摘された。このような、地域独自の文化的・音声的背景が方言形成にいかに影響してくるのか、という点については、さらに事例による検討を重ねていく必要

がある。

以上の他にも、方言形成における意味変化の東西差の問題を解明していくための課題は多いが、ここでは、「スガリ」の意味変化に関する課題を2つ挙げておくこととする。まず1つ目は、今回紙幅の都合で触れることができなかった、琉球方言における「スガリ」の問題である。『全国方言集覧』によれば、「スガリ」は、琉球では「イイダコ」や「アナダコ」など、＜蛸＞の個別称として用いられている。＜蛸＞の個別称の「スガリ」は、一見意味的には＜似我蜂＞や＜蟻＞とは何も関連が無いように思われる。そのため、いかなる経緯で、「スガリ」が＜蛸＞の個別称へと変化したのかは大いに疑問である。また、琉球の「スガリ」は、地理的に近接している九州の＜蟻＞が伝播し、変化したものなのか、あるいは、他の地方と同様に、＜似我蜂＞が伝播した上で変化したものなのかという点も、「スガリ」の方言形成の全体像を明らかにする上で、今後検討すべき課題であると言える。

また、2つ目の課題は、＜鹿＞を意味する「スガル」の問題である。中央語の文献では、＜似我蜂＞の「スガル」は、『万葉集』以降の用例は得られないことは既に述べた。しかし、中世以降、歌語として＜鹿＞を意味する「スガル」が現れるようになる。この＜鹿＞の「スガル」と＜似我蜂＞の「スガル」とが、意味的・位相的にどう関連するのかは「スガル」の語史を中央語と方言との相関の中で捉える上で非常に興味深い問題である。この点については、また別の機会に論じたい。

文献

安部清哉（1989）「『日本言語地図』三辺境分布・東西辺境分布＝語形図集」フェリス女学院大学紀要24

加藤正信（1987）「方言分布から見た日本語の古層」『月刊言語』16-7

櫛引祐希子（2006）「東西における意味変化のパターンに関する一考察—方言「えずい」を通して—」『日本語学会2006年度春季大会予稿集』

小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房

小林隆（2008）「方言形成における中央語の再生」『シリーズ方言学1　方言の形成』岩波書店

小林隆・篠崎晃一（2003）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』科学研究費報告書

白井祥平監修（2000～2005）『全国方言集覧』太平洋資源開発所

野中健一（2005）『民族昆虫学—昆虫食の自然誌』東京大学出版会

東光治（1943）『萬葉動物：写真と解説』三省堂

本間三郎編（1983）『学研生物図鑑　昆虫Ⅲ』学習研究社